みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

# アラビアンナイト：ファンタジーの源流を探る



| メタデータ | 言語: ja<br>出版者:<br>公開日: 2013-02-25<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 西尾, 哲夫<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | http://hdl.handle.net/10502/4799 |

第五回　10月28日（木）放送／10月29日（金）再放送

# アリババと四十人の盗賊　開け、ゴマ！

## イフタフ・ヤー・シムシム！

シンドバッドやアラジンと並んでよく知られているアリババの物語も、アラビア語の写本が見つかっていません。「アリババと四十人の盗賊」は、ガラン版アラビアンナイトの第十一巻に入っています。前の回でお話したアラジン同様、アリババにもさまざまな要素がつまっています。アリババにもアラジンと同じように、文化越境による多層構造が生じている点が指摘できそうです。

第一回で簡単にあらすじを確認したように、物語の題名は「アリババと四十人の盗賊」ですが、実際に話の中心となるのは、賢い女奴隷のモルジアナと盗賊一味の知恵比べだと言えるでしょう。隠れひそんだ盗賊一味の頭の上から、煮えたぎった油を注いで殺してしまうエピソードが有名ですが、アリババの家を探しあてるまでにも二度、三度と知恵比べがくりか

えされています。アリババは、アラジンのような少年の成長物語としてではなく、知恵を駆使して悪党を出し抜く話として親しまれてきたと言えるでしょう。

アラブ文学では奸智（かんち）をめぐる話が一つのジャンルとなっており、バグダードやカイロで暗躍した実際の泥棒やペテン師をモデルにした作品群もあります。アラブ世界でのヒーローは悪をやっつける側ではなく、悪知恵を使って成功する悪党のほうなのです。とは言っても激情にかられての人殺しや強盗あるいは略奪といった暴力的な悪事はだめで、巧妙な手管や駆け引きを用いなくてはなりません。盗賊団と丁々発止の知恵比べをやって、最後には一味を皆殺しにしたモルジアナは、このジャンルの主人公を代表するキャラクターなのです。

さて、アリババと聞いて誰もが真っ先に思い浮かべるのは「開け、ゴマ！」という例の呪文でしょう。「開け、ゴマ！」はアラビア語でイフタフ・ヤー・シムシム。シムシムというのがゴマを意味しており、英語のセサミなどと同じ語源から生まれた言葉です。ただしアリババの原文（フランス語）では「ゴマよ、なんじを開け！」となっており、閉じた岩肌に向かって唱える呪文というよりは、ゴマそのものに命じるような口調になっています。

ゴマはアフリカ原産とされ、乾燥に強いことで知られています。アリババの物語をガランに伝えたとされるディヤーブの故郷レバノンでは、ゴマは今でも重要な食材です。日本の練りゴマにあたるタヒーナ、さまざまなハーブに塩と煎りゴマを混ぜた万能調味料ザータルなどは、どの家庭にも常備されていると言っていいでしょう。なお、「開け、ゴマ！」という

呪文の由来はよく話題になるのですが、これだと断定できるような答えはありません。ゴマの莢がはじけるときの様子から連想したものだろうとか、性的な暗喩がからんでいるのだろうとかいろいろと言われています。

神秘的な言葉を唱えると洞窟や地下室の入り口が現れるというモティーフは、アラジンの冒頭部にも出てきましたが、そのほかにもさまざまな奇跡譚に登場します。たとえばディヤーブの故郷アレッポに近いマアルーラという町には、キリスト教の聖女テクラをめぐる伝説が残っています。紀元四五年ころ、聖パウロの説教を聞いた少女テクラは婚約を破棄して信仰に生きる決心をしたのですが、当時のキリスト教は禁教でしたから、彼女は町の広場で火あぶりにされることになりました。突然の豪雨で炎が消えたので故郷の町へと戻ったのですが、追っ手から逃れるうちに山中で道が行き止まりとなってしまいました。テクラが奇跡を神に祈ると、山に裂け目ができてテクラを洞窟へと導いたのです。現在、マアルーラには聖テクラの墓とされるものが残っています。

## 女奴隷モルジアナ

アリババの事実上の主人公は、賢い女奴隷のモルジアナです。現在は法的に禁止されていますが、イスラーム社会では奴隷を持つことが許されていました。預言者ムハンマドも奴隷を所有していました。なかでも有名なのは、初代のムアッジン（お祈りの時間を呼びかける

人）であった黒人奴隷のビラールでしょう。軍事奴隷として有名なマムルークなどの例外はありますが、イスラーム社会での奴隷は基本的に家内奴隷であり、その大半が日常雑事を受け持っていました。また四人まで妻を持つことが許されていたこともあり、多数の女奴隷が売買されました。

奴隷の価格は場所や時代によってまちまちなのですが、中世の一記録によると、黒人奴隷は二～三百ディルハム、黒人宦官（かんがん）はその二～三倍の価格。黒人の女奴隷は五百ディルハム程度。歌や技芸にすぐれた女奴隷は一～二万ディルハムという高値で売買されたそうです。時代によって通貨の価値はかなり異なってくるので単純な比較はできないのですが、名作「せむしの話」の支話である「床屋の話」には、「五百ディルハムの遺産のうち、百ディルハムでガラス器を仕入れ、これを二百ディルハムで売りさばこう」と皮算用をしている男が登場しています。ディーナールとは現在もアラブ諸国で使われる通貨単位ですが、アラビアンナイトの場合は基本的にディーナールが金貨、ディルハムが銀貨をあらわしています。換算率は時代によって変化しますが、アッバース朝当時は一ディーナールが二十～二十五ディルハムに相当しました。

ムスリムを奴隷にすることは禁じられていましたから、イスラーム社会の奴隷は基本的に戦争捕虜や奴隷身分の親から生まれた人たちでした。とは言っても実際には奴隷狩りもおこなわれましたし、アフリカからの奴隷をヨーロッパに売っていたのはムスリム商人でした。

一般的に白人奴隷のほうが値段も高く待遇もよかったとされていますが、黒人に対する制度的な身分差別は存在せず、先祖に黒人奴隷がいた場合でもムスリムとしての権利を制限されることはありませんでした。

イスラーム社会では奴隷は解放されて自由身分になることができました。奴隷を解放することで宗教的な徳を増やすことができるとされていましたから、奴隷を解放する旨を記した遺言状を残す人も少なくありませんでした。また、奴隷の功績に免じて解放することもありました。アッバース朝宮廷で活躍し、後にスペインに渡って芸術全般に多大な影響を残したジルヤーブは黒人の解放奴隷だったと言われていますし（ジルヤーブは「クロウタドリ」の意味）、モルジアナも最後は奴隷身分から解放されてアリババの長男と結婚しています。

## 盗賊との知恵比べ

アリババは、トリックのオンパレードとでも言える展開になっています。アリババ側と盗賊との駆け引きについては、ヘロドトスの『歴史』に登場する説話との類似点がはやくから指摘されてきました。これは古代エジプトの伝説上の王ランプシニトスと宝蔵破りの兄弟をめぐる話です。ランプシニトス王の話は中世ヨーロッパで広く流布した『七賢人物語』という説話集にも収録されており、日本の『今昔物語』にも同型の話が入っています。

秘密の洞窟から金貨を持ち帰ったアリババはこれを量るために兄嫁から枡（ます）を借りるのです

が、兄嫁はアリババが貧しいことを知っていましたから、何の穀物を量るのだろうと不思議に思い、枡の底に蜜蝋を塗っておきました。戻ってきた枡には金貨がくっついていたので、アリババが金貨を量ったことがわかってしまいます。

秘密の洞窟のことを聞き出した兄のカシムは欲の深いたちでしたから、自分もそこに出かけていくのですが、呪文を忘れて出られなくなってしまいます。戻ってきた盗賊はカシムを四つ裂きにすると、その死体を入り口に吊り下げました。

洞窟でカシムの死体を見つけたアリババは、これを持ち帰ると葬儀の準備にとりかかりました。カシムの家で使われていた女奴隷のモルジアナは薬種商の店をおとずれ、重病のときにしか使わない薬を買い求めました。こうすれば、カシムが病気で死にかけていると思わせることができます。次にモルジアナは年寄りの靴屋のもとに行くと靴屋に目隠しをして自宅へと案内し、バラバラになったカシムの遺骸を縫い合わせてもらいました。こうしてとどこおりなく葬儀もすみ、町の人たちは、カシムは病気で亡くなったのだと疑わなかったのです。アリババは未亡人となった兄嫁を妻にすると、カシムの家で暮らすことになりました。

さて、誰かが洞窟の秘密に気づいたことを知った盗賊一味は、死体を運び去った者を探し出そうとします。盗賊の一人が靴屋を訪れて死体を縫い合わせたことを聞きつけました。彼は靴屋に目隠しをして案内させるとカシムの家の前までたどり着き、扉に目印をつけます。ところがこれに気づいたモルジアナは近所中の扉に同じ目印をつけてまわりました。この作

戦は失敗し、しくじった子分は罰として殺されてしまいます。このトリックは、先ほどふれた『七賢人物語』の別系統の説話集である『ドロパトス物語』のフランス語訳にも同じようなものが出てきます。そこでは姫のもとに忍んでいった騎士の額に姫が墨をつけるのですが、これに気づいた騎士は王やほかの騎士の額にも墨をつけてしまいます。

とうとう盗賊団の首領が自力でカシムの家を特定し、油壺に子分を潜ませると商人をよそおってアリババを訪問します。壺に潜んで攻撃の時機をうかがうという計略は、紀元前十三世紀に書かれた古代エジプトの話に出てきます。これは、兵士を潜ませた大甕(おおかめ)二百個を贈呈するという計略によって、ヤッファを征服したという話です。もっとも有名なものは、ギリシア神話に出てくるトロイの木馬でしょう。

モルジアナの機転で子分を皆殺しにされた首領は仇討ちを決意し、まずは商人となって店を構えました。首領は辛抱強くアリババの情報を集め、親しくしている商店主の父親がアリババであることをつきとめたのです。アリババは息子の友人の正体には気づかず、彼を家に招いてもてなすことにしました。家に招かれた首領は、「料理には塩を入れないでくれ」と頼みます。モルジアナはこの言葉を聞いて不信に思いました（バートン版には「医者が塩を禁じた」とありますが、ガラン版にはこのような説明はありません）。食卓の塩は客人に対する礼儀ですから、これを拒絶するのは客人としての資格を欠いていることにつながります。果たしてモルジアナは客人が盗賊の首領であることに気づき、一同の前で剣舞を披露すると心づ

最初の日本語訳アリババに描かれたモルジアナ。西洋風の衣装を着て踊っている。矢野龍渓訳「烈女之名誉」(1887) より

けをもらうふりをして首領を刺し殺してしまいました。このようにアリババの物語は、マージナルな立場にある者どうしが知恵を戦わせ、道義的に納得のいく形でのハッピーエンドになるという劇的かつ緊密な構成になっています。

## 洞窟の中のご馳走——ガラン・メモ

先にもお話ししたとおり、アリババもディヤーブから聞いた話だったようです。ガラン版以前に成立したアラビア語写本も見つかっていませんので、現在のところはフランス語で書かれたガラン版がオリジナルということになるわけです。ただしガランは、ディヤーブから聞いたアリババの話をメモにとっているので、こちらのほうがより原型に近いということになるかもしれま

せん。ガランのメモは六枚程度なのですが、ガラン版アリババはもっと長くなっています。細部はガランが記憶に頼って書き入れたのか、脚色もしくは創作が入ったのかもしれません。

その反対に、ガランのメモには記されているのに、ガラン版アリババからは省かれてしまった一節もあります。メモには、アリババが洞窟に入ると「テーブルにはどっさりと食物があり、豪勢なご馳走が並んでいる」と書いてあるのですが、ガラン版では「豪勢なご馳走」が消えて金銀財宝の描写に重心が移っています。つまりガランのメモでは、食事の用意が整えられた隠れ里のような洞窟がイメージされていたのですが、ガラン版になると秘密の宝蔵としてのイメージが強くなっているわけです。とすると、食卓のご馳走には手をつけず、金貨のみを持ち帰ったアリババは、一種のテストに合格して財宝を得たとも解釈できます。このオリジナルの舞台設定は、ラストシーンで、（正しい賓客であれば当然口にするはずの）塩を入れない料理を所望して殺された首領のエピソードに対応しているのかもしれません。

洞窟のご馳走は、ガランのメモに残されたアリババ前半部と「ネズミ浄土」との関連を示唆しているのではないかとする見方もあります。「ネズミ浄土」では地下の異類に食べ物を差し出すことによって財宝を得ているのに対して、ガラン・メモでは洞窟の中の食べ物に手をつけないことで金貨を得る点が異なっていますが、食べ物に対する選択を介して地下（洞窟）の宝を得るという点では共通しています。

さて、ガラン版アリババでは、洞窟の場面は以下のように描写されています。

アリババは暗い場所を想像していたのですが、燦燦（さんさん）とした光を見てたいそう驚きました。そこはたいそう広く、人の手によって見上げるばかりの丸天井が作られていたのです。岩のてっぺんにうがたれた穴からは、まばゆい光がさしていました。アリババの目の前では、山ほどの食糧、うずたかく積み上げられた高級品、絹や緞子（どんす）、豪勢な敷物、そして数え切れぬほどの銀貨と金貨が山積みとなり、あるいは布や革の袋につめられて折り重なっているのです。つらつら考えるに、この洞窟は、何十年いや何百年をかけて世々の盗人どもが集めてきた宝の隠し場所にちがいありません。アリババはぐずぐずせず、やるべきことをすぐに決めました。洞窟に入ると、すぐに入り口が閉じてしまったのですが、開けるための呪文を知っていましたから少しも心配しませんでした。アリババは銀貨には手をつけず、袋詰めになった金貨を手にとりました。

ところがこの場面は、東洋文庫版アリババでは具体的な宝の一つ一つについて延々と描写が続き、二段組で三ページにわたっています。また、物語の最初でアリババが口にする詩もガラン版には載っていません。というのは、東洋文庫版のアリババは、マクドナルドが校訂したアリババ写本を訳したものだからです。一方、バートン版に入っているアリババは、ガラン版のものとよく似ています。それもそのはずで、バートンはガラン版アリババのヒンド

ウスタン語訳を英語に再訳しているのです。では、東洋文庫版の底本となっているマクドナルドの校訂によるアリババ写本とはいったいどのようなものなのでしょう？

## アリババ写本の謎——元本はガラン版アリババか？

ダンカン・ブラック・マクドナルド（一八六三～一九四三）は、スコットランド生まれの有名な東洋学者です。一九一〇年、彼はオックスフォードのボドレアン図書館に所蔵されていたアリババのアラビア語写本を発見し、これこそアリババのアラビア語原典であると主張しました。ただしマクドナルド本人は数年後に、問題のアリババ写本が真正のアラビア語原典ではなかったことを認めています。

東洋文庫版アリババの最後には「この話は、ユーハンナー・ブヌ・ユースフ・ワーリスィーが書き写した」と記してあります。ワーリスィーというアラブ名になっていますが、もとの名前はジャン・ワルシーでした。フランスの有名な東洋学者シルベストル・ド・サシ（一七五八～一八三八）の門弟だった人です。

サッバーグによるアラジン写本が切り張りとリライトによる偽物だったことを見抜いたマフディーは、ワルシー（ヴァルシー）の手によるアリババ写本を詳細に検証し、この写本がガラン版アリババをアラビア語に再訳して大幅に加筆したものであることをつきとめました。

アリババはどこでも人気者。ウズベキスタンの土産物店「アリババと40人の盗賊」にて。（著者撮影）

東洋文庫版のアリババとガラン版のアリババを読み比べてみるとわかるように、東洋文庫版、つまりワルシー写本のアリババは基本的にはガラン版アリババと同じ筋立てになっているのですが、細部の書きこみが多く、アリババの内省という形でイスラーム色を濃くする演出がとられています。ただし、ワルシーに偽写本を作る意図があったかどうかまではわかりません。アラビア語初学者用のテキストを作るためだったかもしれませんし、誰かに依頼されて作ったのかもしれません。いずれにせよワルシー写本は誰が見ても新しい時代の紙に書かれており、これがガラン版以前から存在する古写本だった可能性はないでしょう。

このように現在のところ、アラジンとアリババに関しては、原典となるアラビア語写本は未確認のままなのです。